

## ご挨拶（2021年度/令和3年度）



今年も長引くコロナ禍に翻弄され、さらに10月の本学医学部・歯学部病院一体化に伴う諸々の業務にも忙殺され、ご挨拶が遅れてしまいました。

種々の行動制限・自粛の中、海外や遠隔地の先生方とのオンライン会議・講義の恩恵に預かる一方で、患者さんともお会いできない日も続きました。人と直接会う、時と場所を共有し、真の対話をする必要性を痛感した1年でもありました。

この2年間のコロナ狂想曲がようやく終りつつある今、以前の効率化を希求する生活にどっぷり浸っているうちに、何かとてつもなく大事なものを置き忘れてしまっていたことに気づいたような感覚に囚われてしまいました。

火山学者の鎌田浩毅先生の本を久しぶりに紐解き、「知的で豊かな生活」とはどういうものだろう？と漠と考えていました。

「知的で豊かな生活」とは？

「何のために火山を研究するのか？研究をどんどん進めていき、次々と論

文を出して、自然のからくりを理解していった、物事の本質をつかむためか？

しかし、それらは本来、急いでやることではないのではないのか。自分自身のペースで自然を理解し、見る眼を徐々に豊かにし、自然のからくりをゆっくりと解き明かし、少しだけ論文を書き、おちついて着実に知性の営みを続けていくこと。それが本当の目的なのではないのか？

急いで真実を明らかにすること、研究成果をあげること、研究競争の中で他者に勝つことではなく、周囲に気を十分にくばり、自然と人間について深く知り、感覚鋭く反応し、素晴らしい出逢いに感動し、新鮮な驚きをもち、じっくりと理解し、自信を持ち、世界に満足し、日々をゆったりと過ごしていくことではないのか。

本当の私の人生の目標は、まとわりつく現代生活のしがらみに振り回されず、みずから空回りせず、虚偽の衣をはがし、本来の私の姿と本質的な生き方に近づくこと。そのためには、よく見ること、よく聞くこと、よく味わうこと、よく感じること。」

(鎌田浩毅 「西日本大震災に備えよ」PHP新書 2015、P157-159)

また同書で鎌田教授は、以下のようにも述べておられます。

「最短の距離と時間で目的地に達しなくても良いのである。これからの日本人には、こうしてゆっくりと待つて生きる生き方が必要なのではないか、(中略)

今まで当たり前のように使っていたインフラがなくなっても、工夫することで生活に支障をきたさずに暮らす知恵である。」(前掲 P160)

この本は東日本大震災の直後に著されたものですが、今回のコロナ禍にもそのままだてはまる内容だと感服しました。

僕には歯学、dentistry という学問体系への拘りがあります。歯医者の世界では相変わらず「職人芸」的なものが根強く、しばしば「evidence がない」「再現性に乏しい」「理解なき信仰」といったご批判を賜ります。しかし、データに還元できない職人的な世界観には、本当はすごく深みがあります。泥臭い世界から、実は新しく美しい未知の世界が開かれていくものです。

当科での薬物療法や心理療法が科学的とか何とか称していますけれども、所

詮それは「職人芸」と同じだということです。その「こつ」とか「秘訣」までは一応伝えることは可能です。しかし、肝腎なところは教えられない、と深町建先生が「摂食異常症の治療」に書き遺されています。

「職人芸」というと、何だかアタマを使わなくて技巧的なことばかりのように聞こえるかも知れませんが、「出来るか出来ないかがはっきりと出る」厳しさがあります。泥臭い世界から、実は新しく美しい未知の世界が開かれていくものです。それを大学院の4年間で伝えることは、まして学部生時代のわずかな時間で教えることは非常に困難なことのようです。

しかし、深町先生は「診断にしろ治療にしろ、その手技は初心者は初心者なりにとりくめるものでないといけない」「やはり5年の年期を積み、5年だけの臨床経験が生かされてその人の技法として成長するものでなければ、その教育環境の何処かが間違っていると云わなければならない」と、キビシく戒められています（「摂食異常症の治療」）。「技術は盗め」と言った育てられ方を受けた世代ですので、あまり「ああしろ、こうしろ」という指導は好みませんが、歯科ではある程度手取り足取りも必要だと感じています。

教えること、学ぶことの難しさは、教えすぎに注意が必要なことです。「簡単に得た情報では、考えることが少なくなってしまう。安易に解答が得られると、直感を生む脳機能は低下する」という長嶺敬彦先生のお言葉にも表れています。長嶺先生に教わった Syndemic という概念の適用を BDJ に発表できたのは、今年良かったことの一つです。

“「手間」の中にある大切なもの”（前掲 P 1 4 0 - 1 4 2）を見失っていなかったらどうかと反省しつつ、深みや厚みのある研究や教育を志向しています。

ところが「指定国立大学」になると、泥臭い臨床研究ばかりでは science として他の領域（他学部の研究）に見劣りしてしまいます。ですが、あまりに「科学」を追求しようとする、「それは歯学か？」という質問に窮してしまいかねません。来年度から、この「指定国立大学」となる本学での歯学のあり方も、ひいては当分野のあり方もよく考える必要があります。

「科学は全てを予見できるものではない。（中略）常に正確な情報をリアルタイムで取得し、臨機応変に自分の行動を変える必要があるのである。過去に立てた方針や古いシミュレーション結果に引きずられて行動すると、思わぬ失敗をする恐れがある」（前掲 p 1 6 5）

今読めば、コロナ禍にもぴったり当てはまる卓見ですが、翻弄されている最中にはなかなか気がつけなかったことでした。

いつの間にか「出された問題に答える」ことが習性となってしまう、自分の判断より「お上からのお達し」を優先して行動するようになっていないか？ それでなくても場当たりの「評価されること」ばかり勉強・仕事するようになっていないか？ 身につまされることばかりです。

やはり「患者さんから学び、患者さんに還元する」という臨床研究の大原則を墨守していきたくて考えています。歯科の患者さんという特殊性があっても、その同じ患者さんが内科各科や耳鼻咽喉科や整形外科、あるいはペインクリニックなどでも同じような問題を呈しているようすし、その治療法には普遍性もしくは幾許かの共通性があるように思います。「人間がとらわれてしまった言葉と知識と学問の罫」（前掲 p159）から脱却し、残り9年で何をなすべきか、よくよく考えて動いていく必要があります。

## 地域医療への視点

研修医の頃からずっとお世話になっている福岡の病院が今年で開院40周年を迎えました。2021年4月にめでたく新病院に移転したのですが、まんまとコロナ禍に翻弄され、1年のうち半分以上帰福が叶わず、患者さんにお会いできない日々悶々としていました。秋を過ぎ、新しい診療室での喜びも最近ようやく実感されるようになってきたところです。診療室で人と人が直接会うことの大事さと必要性も痛感しました。



「(中略)災害も恵みを合わせて付き合う覚悟をする。そして災害は短く、恵みは長いことに思いを馳せて、乗り切るのである。」(前掲 p185)

僕が研修医でお世話になったのは1991年の春でした。当時は開院10周年でした。鑑みると入院患者さんの質・層の変化と病院機能や歯科口腔外科の業務内容の変化などに隔世の感があります。これらは病院の中で歯科が求められることの劇的な変化を反映しています。自分たちのやりたい医療から地域で求め

られる医療への転換はさぞ厳しい課題であったかと思えます。常勤の先生たちも歯科衛生士さんたちとスタッフさんたちも、ものすごい努力と研鑽を重ねてきた証左です。毎回、気持ちよく仕事させていただける診療環境に感謝しています。



東京の歯学部病院（2021年9月でとうとう無くなってしまいましたが）のぬるま湯に安住しないようにと毎月戒められる出張でした。今回のようなパンデミックや、あるいは自然災害にも備えた歯科心身医療体制の構築も大きな宿題です。

実は年末に、故郷で医療従事者対象の講演をさせて頂く機会がありました。コロナ禍で約2年間も帰省が叶いませんでしたし、久しぶりの瀬戸内海も中国山地の山々も何も変わっていないように見えました。しかし、市医師会の会長職を背負っている同級生からは、人口5万人程度の地方都市での医師確保の困難性や各専門科の隙間医療の問題（まさに今回お呼びがかかった一因だったのですが）の切実さを伺いました。



専門医を受診しろ、というのは都会の論理です。専門細分化と集約化の反面で、そういう専門医療が利用できない環境で一体どうするのか？専門特化にかまけ、プライマリケアへのフィードバックの視点が欠けていたことに気付かされました。オンライン診療も含め、限られた医療資源の中で、あちこちに取り残される患者さんが出ないように仕組みを考えねばならないと切に感じました。しかし、こういう時代だからこそ、できることがいくつもあるように思います。一般開業歯科医向けの歯科心身症診療パッケージの開発も喫緊の課題です。

「道のため、来たれ！」（村上もとか「龍」1巻、p51）

夏に東進ハイスクールの受験生・父兄向け講演会にお招きいただき、（残念な

がらオンライン動画になってしまいましたが) メッセージを一言、と言われ、ふと思いついたのはこの一言でした。

歯科に心身医学を定着させる、という亡き恩師の宿願を果たすべく、自分なりに必死にやってきた 15 年間でした。しかし、さて 15 年分の成果は?と問われると、人材育成という点では甚だ心もとない限りです。新しい領域で、しかも幅広い範囲の医学的素養も求められる分野ですので、そう簡単に人が育つわけではないのですが、15 年間といえば、僕が恩師の定年までに過ごした期間と一緒にです。当分野に着任時には、24 年間も与えていただいたにもかかわらず、もうその半分も終え、残りの任期も 10 年を切ったという焦りもあります。

そんな時期でしたが、ふとよぎったのが下記の台詞でした。

「そうだった、絶望するのはまだ早いのだ。

真の武の道を滅びさせぬために、私も死ぬまで攻めてゆかねばならぬ・・・

いや・・・たとえわたしが死んだ後でも・・・

彼らの熱い心の中にまかれた種が、立派に芽を吹き育てゆくことを信じよう！」(村上もとか「龍」 4 巻 p95)



憂きことのなほこの上に積もれかし限りある身の力試さん (前掲 p142)

(2022 年 1 月 28 日 文責 豊福明)